恋人たちの今

――口紅の碑残照

山手　俊介

1

妻を誘って、白浜の納骨堂へ行った。ゴールデン・ウイークも後半の四日午後である。今年は亡くなった父の命日も、春の彼岸にも揃って休みを取ることができなかったため、気になりつつも墓参りが延び延びになっていた。

「Uターンラッシュに重なると、帰りが心配だけどなぁ」

行楽シーズンの渋滞に巻き込まれた時の怖さを私は想像した。抜け道はいくらでもあるのだが、相当山の中の細い道を迂回しなければならない。

「行きは良いよい、帰りは怖い？かもね。でも行ってみてからの話」

助手席の妻は久しぶりのドライブに気持ちが弾んでいるようでもある。

冗談を交わしながら私たちは軽の四輪車を走らせた。既に二十万キロ近く走っているポンコツ車である。しかし、よく走った。県内のほとんどの道路という道路、田舎道は、この二十年あまりの間に走破している。

ところが、妻も私も同じ県内の、それも白浜からは車でわずか二時間ばかりの距離の＊＊市に住んでいながら、墓参り以外の目的で観光地白浜を訪れることは滅多になかった。ついでだから、観光客でにぎわう三段壁や白良浜もこの際観てこようとも話がまとまった。

結婚前には、デートを兼ねて何度か千畳敷から三段壁を訪ねたものだが、その度に観光地の放つ俗っぽさが鼻につき、嫌気が差していた。以来、白浜へは父の墓参りで訪れることはあっ

ても、人ごみであふれる名所をわざわざ観て巡ろうとは考えもしなかったのだ。
そんな白浜を、ついでとはいえ巡ってみようという気持ちになったのには、実のところ、もう一つ別の理由があった。
それは数日前、たまたま眼にした古い新聞の和歌山県版に載った囲み記事だった。
三段壁に残る「口紅の碑」が年々風化され、このままでは消えてしまう、と報じていた。
私も妻もそんな碑についてはまったく知らなかった。ましてや観光名所の断崖から心中した若い男女が死の直前、岩肌に口紅で残した「書置き」だと聞くのは初めてだった。
私はその記事に関心を抱いた。妻に見せると、本当かしら？ 少し眉唾っぽいけれど一度見ておく価値はあるかもね、と言った。
「ついでといったら失礼かもしれないけど、見てきましょうか」
それで話が決まった。勤務のシフトもうまい具合に組まれていた。後半の二日間が二人とも休みになっていた。それで休みに入るや早速墓参りを兼ねて行くことにしたのだ。その日はちょうど母のデイサービスの日でもあった。
当然母には内緒だった。父の墓参りに母を連れて行かないわけには行かなかったからだ。しかし、車椅子の母を連れて墓参りだけならよいが、三段壁で碑を探すのは無理だった。観光客などが簡単にわかるような場所にあればもっと知られているはずだったからだ。
私たちは母を送り出すや、早々に家を出た。来年が父の七回忌になると気づいたのは白浜に着く手前だった。
「親不孝もここまでくると、親父も笑うしかないだろう」
「お義母さんには悪いことをしたかな？」
「今度ゆっくり連れて来ればいいさ。秋のお彼岸がある。そのときで十分さ。――渋滞に巻き込まれたりしたらトイレにまず困るよ」
「そうね、オムツを嫌がる人だもんね」
休日の国道は予想通り混雑していた。ことに「紀伊山地の霊場と参詣道」が待望のユネスコの世界遺産に四年前登録されてからはさらに観光客が増えているようだった。
「やっぱり連休を過ぎてからにしたほうがよかったかな？ でもなかなか揃って休みが取れないわよね」
妻は反対車線の車の列を眺めながら呟いた。
「あせらず行きましょうか、陽も随分長くなってきたことだし」
妻は持ってきた新聞記事の切抜きをバックから取り出すと、再度読み始めた。

2

その心中は昭和二十五年の六月十日に起きた。岩肌に口紅で「書置き」を残さなければ、ほかの多くの自殺者や心中とともに人々の記憶からとっくに忘れ去られていたかもしれなかった。今でも年間十人前後が五十メートル近い断崖を飛び降りている。町では、防止のため近々柵を設けるらしいが、果たしてどれほどの効果が期待できるのか。全国で年間三万人を超える自殺者を数えるという昨今でもあった。

――が、口紅で自然の岩に「書置き」を残したという艶っぽさから、当時はニュースになり、今もその碑を知る人の間では若い二人の悲恋は語り継がれているらしい。

私はその「書置き」に説明のしにくい切なさを覚えるとともに、自由の名の下、何でも許される今の時代が直面している紊乱に、どこか救いのなさを感じないわけにはいかなかった。

別れの言葉をよく口紅で鏡に書いたりするのはテレビのドラマや映画で見慣れていたが、現実に、それも遺書として残されているとなると、不謹慎ながらこの眼で確かめたい衝動に駆られた。

記事によると、碑は口紅で書いた文字の上から、のちに遺族が彫刻家に依頼し刻んだとあった。それはそうだろう、口紅の文字が五十年以上も持つわけがない。風化しつつあるというのは、刻んだ文字だった。

黒潮が洗う海岸である。風雨もすさまじく、その厳しい自然が造り出した三段壁の景観である、直接波にさらされなくても、潮風は容赦がない。最近でこそ少なくなったが、紀伊水道は台風の銀座通りでもあった。岩場に砕け散る波は白浜に限らず荒々しかった。三百㌔に及ぶ紀伊半島の海岸線がほとんど荒磯であるのを見ても判る。砂浜の海岸などほんのわずかな内海にしかない。海水浴場としてにぎわう白良浜もいわば内海である。それでも波風に砂がさらわれるため、冬場にネットを張ったり、よそから白砂を運び込んで維持しているのだ。

ことにこの辺り一帯は軟らかい砂岩でできた海岸線でもあった。日々侵食が進んでいる。「何とか残したいものだ」と記事は結んでいたが、時間と共の風化はやむをえないように思えた。

3

三段壁から飛び込んだのは、大阪の二十二歳の男性と十八歳の女性だった。二人は先妻の長男と、後妻の連れ子で、戸籍の上では「兄妹」だった。古めかしい言い方だが、許されない結婚を悲観したらしい。

死の直前に実家の両親に遺書を送っており、駆けつけた時には既に入水していた。家族が遺品を捜して付近を捜索したところ、近くの岩肌に口紅で、最期の言葉が残されているのを発見したらしい。言葉は短く「白浜の海は今日も荒れている」とだけ書かれ、六月十日の日付と二人の名前が記してあったという。後日、両親が知り合いの彫刻家に依頼し、口紅の文字跡をそのまま刻んだ、と記事は紹介していた。

現在ではとても信じられないような心中事件だが、昭和二十五年といえば、私などまだ生まれていない時代であり、戦前戦中の厳しい道徳観の生きていた時代であったのだろう。血のつながりのまったくない二人でも戸籍上「兄妹」となるとほかに選ぶべき道が見出せなかったのかもしれなかった。それに二人とも若かった。出会い系で知り合い、その日のうちに関係を結ぶことなど平気な昨今であり、節度やモラルなどが完全に死語と化した現在でもある、それを考えると痛ましさが募った。

白浜に着いたのは、午後二時を過ぎていた。さすがに南行きの渋滞に疲れ、お腹もすいていた。

出かけに妻が用意した、おにぎりとお茶で、とりあえず手前の千畳敷で私たちは遅い昼食

を摂ることにした。青空の下、潮風の中での腹ごしらえもまた楽しいかもしれないと妻が慌しく作ったのだ。
「きっときれいな空気の中で吸う煙草も美味しいわよ」
ついでの皮肉もちゃんと忘れなかった。
砂岩が侵食してできた千畳敷は、三段壁と隣接した海岸だった。広い駐車場が整備されており、その後ろ、つまり海とは反対の入り口周辺は松林の公園になっていた。公園には小さな四阿(あずまや)風のテーブルと椅子を備えた休憩所もあった。
海へ突き出した岩場は、さながら畳千畳はあろうかと思われるほどの広さを誇り、紀伊水道に面している。夕陽の美しい場所としても知られ、この時刻太陽はまだ中天にあったが、千畳敷のいたるところで若いカップルがおもいおもいに肩を寄せ合っていた。
海はどこまでも青く、ここでは彼方に水平線が見渡せた。
千畳敷の名物は、岩場もさることながら、なんと言っても岩肌に刻んだ夥しい恋人たちの落書きである。自然の景観を売り物にする観光名所に、一番似合わない光景だが、一向に止まらない。唯一の慰めは昨今のスプレーなどによる落書きと異なり、それが相合傘のマークの下に刻んだ名前であったり、この地を訪れた記念に刻んだ日にちであることだった。もちろん許される行為ではない。――が、そこにはこの地を訪れた恋人たちの今がそれぞれに刻まれていたことも確かだった。
私にはそれがほほえましかった。落書きを肯定するわけではないが、岩場に自分たちの名前を刻んでいるときの、身勝手ではあるものの恋人たちの喜びや幸福感が想像できたからである。
これから訪れようとしている「口紅の碑」もまた意味こそ違うものの岩に刻んだ恋人たちの名前となんら変わらないように思えた。異なるのはそれが一方は悲しいまでの「書置き」であることだろう。しかし、それが同じ海岸の岩に刻んだ文字でも風化を懸念する声になっている。
私たちは岩場に降りて、腰を下ろした。見るまでもなく至るところに大小さまざまな名前が刻まれている。落書きのないところを探すほうが難しいほどだった。一時景観を損ねると言うので町が消しかけたようだが、追いつかずに止めたらしい。かなり英語やハングル文字も多かった。
さすがに最近は新婚旅行で訪れる人はほとんどいないが、逆に京阪神に近いためか、手軽な行楽地として人気があり、若者、ことに女の子にとって夏場は人気の観光地になっているとも聞いていた。
そんなカップルが、その日の記念として岩に名前と日付を残す。おそらく何千、何万というカップルが記念の刻印を残しているのだろう。
「みんなその後うまく行っているのかしら?」
妻は怪訝そうに呟き、きっと後悔している人もいるかもしれないわね、と笑った。
「あるいは夢の跡になってしまい後悔しているカップルもいるかもしれないだろうね」

4

妻は少し下がった岩場に窪地を見つけ、ここでお昼にしましょうよ、とバンダナを広げた。おにぎりと急ごしらえのゆで卵を拡げる。
「はい、お茶」
ポットのキャップに熱いお茶を注いだ。
「ピクニックにでも来た気分ね」
空はどこまでも澄み渡り、風もほとんどなかった。海は少し傾いた日差しを受けてまぶしいほど輝いており、微かに潮騒が遠く聞こえる。
岩場の先端には釣りを楽しんでいる人もいたが、広い岩場を占めているのはほとんどが若いカップルだった。それぞれに肩を寄せ合い、自分たちだけの時間の中に佇んでいた。駐車場には京阪神方面のナンバーをつけた車が多かったが、やはり手ごろなデートの場所になっているのだろう。
それにしても、岩場は落書きだらけだった。落書きのない場所を探すほうが難しいほどの名前と日付が刻み込まれていた。
「落書きを止めさせるには、それに代わるものを作ってあげればいいのよ。例えばだけど嵯峨野の直指庵みたいに。――でも、あそこは女の子にとって悲しい、つらい思いを慰めるための場所みたいだけれどね。でも至るところに『落書き禁止』の看板を立てるより、海に向かって小さな庵かチャペル風のお洒落な建物を建てて、そこに幸せのノートでも置いてみたら、と思うわ」
「そんなものかねぇ」
「だって哀しい、嬉しいと言ったって若い時の気分なんて意外にその程度のものよ。だからね、思い切って直指庵とは逆の場所にしたらいいのよ。南国の燦燦と降り注ぐ明るい太陽、海が眼の前いっぱいに広がる開放的なこの風景、恋人たちにとって最高に幸せを感じられる場所じゃない？　わたしならそうしてあげるな。そこで幸せな今このときの互いの気持ちを書けるようにしてあげるわ。そしてノートは永久保管してあげるの。いつでも見に来られるようにね。もちろんそのときは永遠に削除は出来ません、って約束にしなくちゃね」
確かに、『落書き禁止』の看板をやたらに立てるより、粋な計らいかもしれなかった。
「若いカップルならやっぱり相合傘と名前かな？　ノートならもう少しましなことを書くかもしれないな。例えばあそこの二人なんか」
私は岩場の先端で互いの体に手を回して海を見詰めているカップルを眼で示した。まるで人目をはばかることなく、体を寄せ合っている。
「ちょうど博君ぐらいの年齢かしら」
「そうだな、博ぐらいだろうな、どう見ても」
博と言うのは弟夫婦の長男で、私の甥っ子でもある。親元を離れ、今神戸の大学に通っているが、どうやらアルバイトにばかり精をだしているようで、留年させられそうだという。私は二人の後姿に、甥っ子を重ねた。両手を拡げるとよちよち歩きで飛び込んできたあいつももう彼女を作るような年齢になっている。自分も歳も取るはずだった。
「うらやましいでしょう？　若いカップルが」

「いや、そうじゃないがあの二人を見ていても思うんだが、結婚なんてずっとまだ先だろう。しかし、今夜は白浜に泊まるのだろ？」
「たぶんそうみたいだわね。でも今の子ってそうよ」
「それが妙に、ひっかかって。年齢のせいなんだろうかね」
「そうね、わたしが娘の親なら絶対に許さないと思うわね」
「当然さ、どこの親でもそうだろう」
「そうよね」
「かなり昔、同棲時代と言う言葉が流行った。言葉だけじゃなく、現実にそうした若いカップルが多かった。しかし、どこか違うんだな」
「『神田川』の世界ね？　古い古い。わたしに言わせれば本質的には変わりないとは思うけど、でもどこか生活感はあったみたいよね。今みたいに簡単に知り合ってどうこうと言うのとは少し違ったみたいよね」
「そこなんだ、生活感の問題なんだ。背景には貧しい四畳半一間のアパートがあった」
「そう言えばこの間、美子さん愚痴ってたわよね」
　妻は今でも思い出すと可笑しいのか、頬をゆるめた。
　美子と言うのは弟である秀二の嫁である。独立行政法人の循環器系の病院に看護師として長年勤務しており、時々、今の医師は医療技術の進歩で病気に対する知識や診断力はすごいけど、一番大事な人間を診ていないと厳しいことを口にする。妻とはよく携帯でメールのやり取りをしていて、互いに亭主の悪口を言い合う仲でもある。
　そんな弟夫婦の家をたまたま訪れたところ、話題が甥っ子の話になったのだ。マンションの家賃が二ヶ月も滞納になっていると電話があったので、電話をかけるが通じないし、メールを入れても返事一つない。それでたまりかねて二人で朝早く夙川のマンションに行ったのだと言う。
「きちんと仕送りは毎月してるのよ。それなのに、一体何を考えているのか。――本当にもう育て方を間違えたわ」
　彼女は腹が立って仕方がない、とでも言うようにこぼしたのだ。
「いくら部屋のドアを叩いても開けないんですよ。すぐに開けられないはずよ、彼女が来ていたんだから。わたし、やっと中に入れてもらってその娘に咄嗟のこととは言えいつもお世話になります、って挨拶したのよ。そんな自分が情けないやら恥ずかしいやら」
　その時の光景を振り返ってか、顔を真っ赤にして両手で覆った。
「してやられたと思ったわ。後で博には叱り飛ばしてやったけど、絶対に留年は認めないからと言うのが精一杯。男の子だからかまわないと言うんじゃないけど、ちょっとひどすぎると思いません？」
　開いた口が塞がらなかった、とその顔は語っていた。
「実際おれも呆れてものも言えなかったが、男の子ってのはある日突然母親を驚かすらしいな。兄貴も高校のとき、ヌード写真の載ったポルノ雑誌を隠していてお袋を驚かせたよな？　今から思うと可愛らしい雑誌だったが。――しかし、それはそれとしてきちんと三つ指をついて挨拶されるし、こっちのほうが戸惑うくらいしっかりした良さそうな娘でね。いずれ彼女ぐらいはつくるだろうと覚悟はしていたんで、つまらん娘など引っ掛けていたら、と俺はむしろそっちの

ほうが心配だったがね」
「まったく何を暢気なことを。まだ卒業するまで二年もあるんですよ」
「そんなことは判っているさ。しかし、博ももう二十歳だ。ポン大とはいえ大学に通っていながら彼女も出来ないようじゃこれもまた心配だ。
「まったくもう息子には甘いんだから。確かに育ちのよさそうな、博には過ぎた娘さんだとは思いましたけど、今時の子はわかりませんね。何を基準に判断をしたらよいのか。――でも、あなたの給料はすべて仕送りなのよ、覚えていてね。彼女を作るんだったらせめて卒業して、自分で生活が出来るようになってからにしてほしいわ。もし大学を留年されたらどうするの。あなたの煙草代はもちろんとしてもお酒も止めてもらいますからね」
　段々冗談では済まなさそうな空気に変わってきたのだ。母親というのは息子に対してはなかなか親離れが出来ないらしい。ましてや長男である、いくら下に二人の娘がいても長男というのは別物らしい。
「博のやつ、来るならくるで連絡ぐらいくれたら良いのに、なんてぬかしやがって。連絡が取れないからわざわざ来たことさえわかっていない」
　弟はそう言いながらも、どこか嬉しそうに手酌で日本酒をかたむけながら笑った。よほど可愛いらしい娘さんだったのだろう。あるいはもうそろそろ息子に嫁が欲しい年齢に差しかかっているのかもしれなかった。
　弟ならきっと息子のためなら煙草も酒も止めるかもしれない、と考えると妙に稚気をおぼえ、父が思い出された。死んだ親父も長男の私にはすこぶる甘かったからだ。叱られた記憶というものがまったくない。弟もそれに輪をかけて子供には甘く、二人の娘にも言いなりである。いずれは迎えることになる嫁にも弱いだろうと容易に想像がついた。
「うまく行ってるのかしらね、博君」
「どうなんだろうね、しっかりした娘さんだったと言ってたから続いてるんじゃないかな？――最も弟の眼はあまりあてにはならないが、しっかり具合は美子も認めているんだからね」
「美子さん、誰に似たんだろうってあなたの顔ばかり見てたわよ」
「そりゃ猫を被っている弟にだろう。まぁ、たまには隔世遺伝ってこともあるらしいから、伯父に似るということもないではないらしいが」
　私たちはどこかで、そんな弟夫婦のやり取りを羨ましいと思わないではなかった。子供に恵まれなかった私たちには望むべくもない心配であり、弟夫婦の間の痴話にも似たささやかな諍いであったからだ。
「美子さんったら、博君にべったりだから。半分は嫉妬心が女の子にあるのよね、きっと」
「そうかも知れんな。高校時代に父親を亡くし、兄弟もいない。母親を亡くしてからでももう何年になる？　博がまだ幼稚園に入る前だったから――気持ちはわかるよなぁ」
「あそこの二人もどこかに名前を刻んだのかしら？」
「おそらくね。これだけ岩場が名前だらけだと刻みたくもなるさ」
「そうね、綺麗な場所にはなかなか落書きはしにくいものよね。時々スプレーで壁やシャッターにしてあるのを眼にするけど、あれは変に怖いわ。――まるで人間の心の荒びみたいで。ここの落書きはそれに比べると随分可愛いものかも知れないわね」

「だからたまにはここに来て岩肌に名前を刻んだときの自分たちを思い出せば良いんだよ」
「それって、もしかして離婚の何パーセントかは減るだろうってこと？」
妻はそう言って涼しげに笑った。

5

碑は、三段壁の展望台からやや千畳敷よりの、断崖のすぐそばの茂みの中にあった。眼の前は五十メートル近い断崖絶壁である。白い、小さな波がはるか下の磯辺を洗っていた。覗き込むと吸い込まれそうなほど深い紺碧の海が口を開けていた。
木立に囲まれていて、なかなか見つけられず、二十分近くは探しただろうか。いくら観光名所でも書置きである「口紅の碑」は売り物になどしていないから、誰かに訊くというわけにもいかなかった。なかなか見つからず、諦めかけていたときである。
「あったわよ！」
妻が突然声を上げた。すぐ眼と鼻の先である。何度も傍を通りすぎていながら、私が気が付かなかっただけだったのだ。
「ここよ、ここ」
そこはちょうど木立の陰になっていて、横に回りこまないと判らない場所だった。背丈を越える自然の岩に、最期の言葉は刻まれていた。

白浜の海は今日も荒れてゐる
1950・6・10

そして、二人の名前が三行目にあった。あきらかに男の文字だった。
微かに胸が騒いだ。二十二歳と十八歳の、あまりにも若い、というより幼いカップルである。他に選択肢がなかったのか、と考えるとやるせなさが先立った。
実際に碑を目の当たりにすると、さほど消えかかっているようにも見えず、六十年近くも過ぎているとは感じられなかった。が、じっと見詰めているとどこか生々しさがあり、同時に痛ましさが沸いてきた。今の時代では考えられない切なさも混じっていた。それほど風俗や慣習が二十年ほど前のバブル期を境にすっかり様変わりしてしまっていた。
私たちは無言のまま碑に刻まれた文字を見詰めた。
「やはり今の時代のほうがずっと良いわね、何でも自由にできて」
妻の指先が文字の上を慈しむようにゆっくりとなぞっていく。表情も心なしか固い。短い、潮騒だけの静かな時間が流れていた。
「――行きましょうか」
やがてなぞり終えた妻が言った。その顔は不思議に晴れ晴れとしている。最初の固い、こわばったような表情は消えている。
私は妻に促されるまま、その場を離れた。すぐ横には海への断崖があたかも人を招くように口を開けていた。私たちは展望台のほうに続く道を戻った。

「来る前にね、わたし、この碑のこと調べたの。記事を読んだときは本当かしらと思って信じていなかったんだけど、その中にね『お母さん、僕は一人で自殺しようと思ひ、八日、白濱に来ましたが後に残る貞子が可愛想なので電報で呼び寄せ、九日午後二人ゆきます。先立つ不幸をお詫びします。お母さん今は永遠に会へる事なく又許される事なく二人は淋しくお別れします』と言う遺書が、ここに残されていた手提げ袋の中のノートに書かれてあったと紹介されていたの。靴とパラソルも残されていたと書いてあったわ。それを読んだ時、遺書の写しもひょっとしたら地元の警察なり、古い記録に残っているんじゃないかしらと思ったの。一本の口紅で岩に書ける字数にしたらこんなもんかなって変に納得したわ。多少記事とはいきさつが違うみたいだったけど」

私は先ほど千畳敷で見た多くの若いカップルを思い出していた。人目もはばからず、体を寄せ合い、岩場で海を眺めていた二人の姿もその中にはあった。

「だから、他に書き残すことはもうなかったんだ、二人は自分たちのためにあの言葉を書き残したんだ。――そう思ったらなんだか急に愛しくなってきて。恋人たちの今もいろいろ、って考えちゃった」

妻は太陽の光をまぶしそうに浴びながら白い歯を見せた。

「だから、これも落書きには違いないけど、大事に残してあげたいわね」

千畳敷の『落書き禁止』の看板はやはり不釣合いだと思った。

6

私たちは展望台に戻ると、ベンチに腰を下ろし、観光客でにぎわう人の波を眺めていた。団体客や家族連れが多かったが、若いカップルもそれに負けないほどだった。記念写真を撮ったり、断崖を見下ろしている。

その時だった。

「すみませーん！」

と小走りに駆け寄ってくるカップルの姿が眼に飛び込んできた。カメラを手にした、見るからに若い恋人らしい二人である。

「すみませんが、シャッターをお願いできませんか」

声をかけてきたのはピンクのワンピースが良く似合う女の子のほうだった。二人ともまだ二十歳になるかならないかのままごとのような年頃である。羞恥そうに男の子が後を着いてくる。それぞれにデジタルカメラを持っているところを見ると、まだ深い関係には程遠い、デートの段階らしい。ジーンズ姿の男の子もはにかんだように頭を下げた。

「良いわよ。ただし小母さんカメラは苦手だからきちんと撮れてなかったらごめんね」

妻は気軽に返事をし、立ち上がった。訊くと神戸から来たのだという。二人はそれぞれのカメラで写してほしいと言った。恋人同士というにはどこか硬い雰囲気があるのも頷けた。断崖の海と観光案内板を背景にしたいらしい。そこが自殺の名所だということなど知らないようだ。屈託のない笑顔を浮かべ、二人はお決まりのポーズを取った。妻は嬉しそうに二台のカメラを預かり、シャッターを切る。

「大丈夫かな？　もし写りが悪かったらごめんなさいね」
「デジカメだからすぐにその場で写り具合が見られるから大丈夫だよ」
私は口を出すまいと思ったが、あまりの妻のお惚けに苦笑した。
「そうなんだ？　この場で確認が出来るんだ」
妻の機械音痴は想像以上だった。
「写りが悪かったら消して何回でも撮り直せるんだ？　それはそれは便利な時代になりまして」
そんな妻に二人はすっかり気を許したのか、表情も、態度も柔らかくなっている。私は甥っ子の博を思い浮かべた。このぐらいの年齢だ。ひょっとしたら二人とも同じくらいかもしれない。
妻は二台のカメラを手に、いつの間にか二人の仲に割り込んで入り、縦に構えたり、横に構えたりしながらシャッターを切り、そのたびに確認しては「二人とももっと近寄りなさいよ」とか、「もう少し顔を近づけて」「だめだなぁ、二人とも。まだお互いに遠慮し合ってるんだから。彼さぁ――彼女の肩ぐらい抱いてあげなさいよ」と余計なお節介をやいて楽しんでいる。私はとてもではないが付き合いきれないので、煙草を咥え、三人を眺めていた。
三十分以上妻は二人と遊んだだろうか、何本目かの煙草を吸い終わる頃、妻は携帯を片手に、楽しそうに二人に手を振りながら戻ってきた。
「うまくもう一歩を踏み出させて上げられたかな？」
かなり満足気である。
それをお節介と言うんだ、と言いかけて、ハッとして言葉を呑んだ。本来なら腹を痛めたわが子にそうしたお節介を妻はやきたかったのだ。腹を痛めた子供が誰よりも欲しかったのだ。そのためには不妊の治療も本当は受けたかったのだ。
「――五百万円もあれば十分よ。安いもんだわ。それで治療が受けられ、子供ができるんだったら」
結婚して五年目ぐらいだっただろう。高校時代のクラスメートで、今も時々付き合いをしている妻の友人がそう言って薦めたときのことを思い出した。夫は同族会社の部長をしており、彼女自身も高級乗用車を乗り回す経済的な不自由などまるで知らない友人であった。そんな彼女にすればたかだか五百万円の話だったのだろう。乗用車一台分にも満たない金額である。
「お金さえあれば産まず女でも子供を産むことができるの？　お金で簡単に解決できる問題なの」
私に向かって妻は耐え切れずに泣き叫んだ。それは心の底から振り絞り出すような、抑えていた怒りが爆発した、叫びであった。
しかし、現実には友人の言うとおりだった。人生の九十九パーセントの問題や悩みはお金が解決した。否、してくれるのが今の時代でもあった。同じ人間の命さえ金額の多寡が価値を決めていた。
だが、現実には、プラスチック成型という製造業に携わる私の給料は県が定めた最低賃金ぎりぎりだった。一枚焼いて何十円という利益しか出ない製造業では、とても望むべくもない治療費だった。毎日自ら望んで組み込んでもらっている二時間の残業代と、妻の介護ヘルパーとし

てのパート代を入れても生活は苦しかったのだ。
父の時は何とか生活はできたものの、母が受け取る年金は半額になり、それさえも週三日のデイサービスの費用に消えた。年老いた八十歳を過ぎた母親を抱えながら、準備しておかなければならない葬儀のための預貯金でさえ難しかった。
「いざと言う時はお義兄さん、そんなことは心配しなくても大丈夫よ。私たちに任せておいて」
嫁の美子は絶えずそう言ってくれているものの、私たちには切実な問題でもあった。
むろん里親になるのでさえその程度の年収では首を横に振られるのは眼に見えていた。取り寄せた資料を読んだだけで諦めるしかなかった。
だから結婚した数年は「子供はまだ？」の何気ない一言にどれだけ傷つき、悔しくつらい思いを妻はしたか。善意の一言が時には人の胸を突き刺し、苦しめるのだ。ことに女性の同性に対する安っぽい思いやりの言葉ほど相手を傷つけるものはなかった。
そのころから妻は体のだるさを訴え始め、横になることが多くなった。やがて地元の総合病院の精神神経科にかかり、うつ病と診断され通院するようになったときには、昼と夜が逆転し、リストカットさえしかねないほどの状態だったのだ。
それからカウンセリングを重ね、クスリを服用するようになった。私の残業は減った。時には休みさえ取らなければならなかった。父が残してくれた家にさえ抵当権をつけてしのぐしかなかった。
ようやく平静さを取り戻したのは七年近く経ってからだった。そして、さらに数年過ぎるころから、同じ悩みを抱えた友人が身近にできて、互いに声を掛け合う仲になったころから、子供は産もうとしても産めるものではなく、授かるものだ、と自分を納得させられるようになった。それからはこだわりが氷解したのか、気丈に振舞うようになった。結婚当時の明るさが戻ってきた。
「授からないと言うのもきっと深い意味があるからかもしれないのよね。私たちには私たちの生き方があるのよね。他人と比較ばかりしていてどうするのよねぇ、自分たちの人生なのに」
何時しかそのように笑顔で言えるまでになった。そして、自ら介護ヘルパー二級の資格を取り、訪問介護の仕事を始めるまでになった。一日に二軒から多いときには四軒、五軒と走り回れるようになった。わずかずつではあるものの、借金も返せるようになっていた。
――とは言うものの、わが子がどれだけ欲しかっただろう。どれほど母親になれることを願っただろう。
そんな妻の気持ちを和らげてくれたのが博であり、弟の娘たちであった。嫁の美子が、妻をあなたたちのもう一人のお母さんよ、と絶えず妻に甘える振りをして子供たちを預けに来てくれた。ことに中学校に通っている長女の恵利などは幼いころからしょっちゅう夜勤の夜など泊まりに来て、妻に抱かれて眠った。母親に話しにくいことなどこっそり友達のように最近は相談してもいる。
「ボーイフレンドができたら真っ先に相談に来るのよ」
妻もまたそんなことまで約束をしているようだ。
それだけに、相次ぐ子供への虐待や親としてのまるで自覚のないニュースに接するたびに怒りをあらわにした。

子供とペットの区別さえつかない親がいた。ペットのように可愛がるかと思えば、ペットにさえしないような虐待をし、果ては簡単に命さえ奪ってしまう親がいた。基本的な何かが狂っているとしか思わずにいられない、心の闇を映し出すニュースが毎日のように新聞やテレビに氾濫していたのも事実だった。

甥っ子とその彼女に私は突然会ってみたい衝動に駆られた。妻のお節介に期待をしたくなったのだ。初対面の弟夫婦にその娘はきちんと挨拶をしたというではないか。はっきりと自分の将来の立場を自覚していたからではないのか。甥っ子の年齢からすると二十歳そこそこだろう。ひょっとしたら甥っ子には過ぎた娘かもしれない。弟自身もそのことを案外真っ先に感じ取ったのかもしれなかった。

「今の二人、うまく行くと良いのにね」

妻の嬉しそうな顔がそこにあった。

「そうだな、似合いのカップルだったからな」

「――ただ、あなた気がつかなかった？」

「何にさ？」

「男の子はいいんだけど、女の子の身に着けていたものよ、相当目立たないようにして男の子にあわせていたけど、いいものばかりだったわ。バッグは確かエルメスのケリーバック。――それも外縫いの。使い込むほどよさが出るって言われてるあれ。ちょっと使用感があったからきっとお母さんか誰かからのお譲りかな？」

「そんなに高いものなのか」

「愛人やお金持ちの小父さんと援助交際でもしているならともかく、母から娘に、あるいはおばあちゃんからとか、大事に使っていたものを頂くほどのものよ。高いものかですって？――あなたの給料すべてをつぎ込んでも何か月分いるかしら。半年分ぐらいは最低でも覚悟する必要はあるわね」

「おれには普通のバックにしか見えなかったよ」

「あなたって本当に幸せな人ね。まあ、わたしが何も欲しがらなかったからいいようなものだけど。――多分、彼女は良家のお嬢様、って感じかな？――ワンピースにしても絶対行きつけのお店での仕立てだと思う。とてもシンプルなのに服地が全然違ったもの。パンプスもエルメスだった。――それにヘアメイクにしてもそう、少なくても一週間に一度くらいははきちんとしたサロンに通ってるはずよ。それでないとあんなに綺麗にまとまっていないし、天使の輪がでないわ。顔の肌だって若さだけとは全然違う」

「そんなもんかね？」

「そんなものなのよ、本物のお嬢様は。――だからね、ちょっと男の子とは住んでいる世界が違うかな？って思ったりして」

「しかし、うまく行けば良いんだろ？」

「そうよ、昔ならともかく今の時代ならたいした問題じゃないかもね。でもある種の人たちの間では格差が障害になりうることだってあるわ」

「ある種の人たちってのはなんなんだ？」

「わかりやすく言えば由緒正しい良家のお嬢様とアルバイトをしながら大学に通う、生活が

やっとのわたしたちみたいな貧乏人のことよ」
妻が何気なく口にしたその懸念が、大きな障害になっていたと知るのは後になってからである。特別な家柄でもなく財産を持たない私たちには、何においてもさほどの問題にはならないと考える癖が身についてしまっていたのだ。
妻はすっかり若い二人が気に入ったようだった。ちゃっかり彼女の携帯のアドレスまで訊いていた。
「彼女、由紀ちゃんて言うんだって」
二人とも神戸の大学に通っているらしかった。
「後で早速メールを入れてあげなくちゃ。アドバイス、アドバイス」
駐車場に戻る道すがら、妻は鼻歌を唄っていた。今までにない張り合いを若い二人に見つけたようだった。
私は近いうちに一度妻と甥っ子のアパートを訪ねてみようと思った。会って見て、弟が言うようにそれほど良い娘であるなら弟夫婦を、と言うより嫁の美子を場合によっては説得しなければならない。
私は妻に劣らずお節介な一面を持っていた自分に気づき、弟と一緒に早くも相手の家に貰い受けに行く自分を想像していた。今の二人を見ていて、これまで潜んでいた伯父としての立場に目覚めたのかもしれなかった。
「やはり博の結婚となると貰い受けに俺も行かねばならんだろうな？」
「そりゃそうでしょう。仲人さんと一緒にね。――そろそろ練習をしておいたほうが良いかもしれないんじゃないの？」
父の墓参りが、いつの間にかついでになっていたことに気がついたのは、その後、円月島を回って帰路に着くため、かつての有料道路に出て、国道に差しかかろうとしたときだった。慌てて私は車を白浜にUターンさせた。
父の苦笑いする顔が浮かぶようだった。

7

突然の電話は翌日の朝、妻の携帯にかかってきた。白浜署の生活安全課からだった。
「白浜署？」
妻は驚いたように声を上げた。
「警察が何かしら、昨日は何も違反なんかしていないわよねぇ？」
訊くと今日の未明、三段壁付近でパトロール中の警察官が、心中でもしかねないほど思いつめて暗い海を見詰めていた若いカップルを発見したので不審に思い、保護したのだという。とこころが名前を聞いても一切答えず、住所も言わないらしい。
「どうやら親に知られたくないようなんですわ。それでですね、誰か知り合いはいないのかと訊きましたら、奥さんの名前と携帯の電話番号をやっと話してくれましたので、それで電話をさせていただいたんです」
「そのカップルってピンクのブラウスと白いパンツ姿の？」

「ええ、そうです。男性のほうは、ジーンズに黒のTシャツ、それに白のパーカー姿です」
明らかに昨日三段壁で出会った二人に間違いなかった。
「それでご面倒をおかけしますが、署のほうまでご足労をお願い出来ませんでしょうか。別に犯罪に関係しているとかそうした事犯ではありませんのでご安心ください。署としては事情がわかればすぐに済みますし、察するところ事情がありそうなので、一応身元引き受け人として来ていただける方がいないと。――そのままお帰えしするというわけにも行かないので」
担当の警察官は困惑しているようだった。それでなくても毎年自殺者を出している場所である。キリスト教関係者のボランティアが救命活動をしていて、その何倍もの自殺者を思い留まらせているが、それでも後を絶たない。ましてや夜遅くあんな場所にいれば誰でも不審に思う。
「もし本人が出られるようでしたら、電話を変わっていただけないでしょうか」
「結構ですよ、少々お待ちください」そしてしばらくすると、彼女が出た。
「――もしもし由紀ちゃん?」
妻が声をかけたとたんだった。傍らで耳をそばだてている私の耳にまで泣き声が飛びこんできた。
「小母さんーー」
激しく泣きじゃくりながら、彼女はそれだけ言うと、あとは言葉にならなかった。
「待ってて、すぐこれから行くから、ねっ。待っててね」
そう念を押すように言い、電話をかけてきた警察官に代わってもらった。
「すぐにお伺いしますので、二人をよろしくお願いします」
そして、携帯を閉じようとして、二通のメールが入っていることに妻が気付いたのは、その後だった。一通目は昨夜の十時過ぎに、二通目はその一時間後に入っていた。久しぶりの観光気分に疲れ、早く眠ったため着信に気が付かなかったのだ。警察から携帯に電話がかかってきて初めてメールに気がついた。私たちは顔を一瞬見合わせた。やはりメールは彼女からだった。二度にわたる携帯のメールは短かかったが、二回続けてのメールが逆に切迫した彼女の気持ちを表しているようだった。

「依子小母さま、きょうはほんとうに有難うございました。あたしたち、内緒で白浜に来ました。あたしが彼を誘ったんです。あたしは彼が大好きです。まだ恋人じゃないけど、そうなれたらいいなと。でも、父や母はあたしが一人娘なので父の決めたお婿さんを迎え、父の会社も芦屋の家も継がなければいけないことを理由に、交際を認めてくれません。こんな時間にメールを差し上げて、失礼かと思いましたがごめんなさい」

「やはりもうお休みになられているのですね?家に帰りたくありません。このまま彼とどこかに行ってしまいたい、そんな気持ちです。きょうは大学の友達に頼んで友達の家に泊まりに行くと言ってありますが、明日は遅くても夕方までに帰らなくてはいけません。知り合ったばかりの小母さまにこんな相談をメールでしたりしてごめんなさい。遅い時間です、きっとお休みになっていて当たり前ですよね。彼と今夜ゆっくり海を見ながら考えます。写真、嬉しかっ

たです。夕方、とても綺麗な、まるでわたしたちを包み込んでくれるような美しい夕陽を彼と見ました。海に沈んでゆく夕陽があんなに美しかったなんて、どうして今まで気がつかなかったのかふしぎです」

三段壁に防護柵

景観より人命尊重に方針転換

白浜町は投身自殺が過去最多の十九人に上った三段壁に、防止用の安全柵の設置工事を進めてきたが、このほど終了した。柵は延長三十メートル、高さ一・三メートルの樹脂製で、費用は百五十万円。切り立った岩場への出入り口を閉じるように散策路に沿って設置した。町は三段壁の景観を損ねないようこれまで見合わせてきたが、相次ぐ自殺に、景観よりも人命を守ることに方針を転換、安全柵の設置を決めた。三段壁は紀伊水道に面して高さ五十メートルの断崖が約五百メートルにわたって続く観光名所。しかし、一方では投身自殺が絶えず、白浜署によると二〇〇七年には八人、〇六年は五人、〇五年は九人、〇四年は六人と多く、今年も九月十五日現在八人に上っている。保護される人も昨年は三十二人、〇七年は二十七人、〇六年は十七人、〇五年は二十四人、〇四年は十九人を数えた。（二〇〇九年九月二〇日付＊＊新聞紀南版）

（終わり）

＜参考資料＞
神坂次郎著「紀州歴史散歩」、雑賀貞次郎編「白濱湯崎の諸文献」、紀伊民報、毎日新聞。